

女性研究者支援室の仕事を通して気付いたこと



鍋島美奈子

大阪市立大学大学院工学研究科大学院都市系専攻
[558-8585] 大阪市住吉区杉本3-3-138
准教授, 博士(学術).
専門は都市の熱環境, 都市と建築の設備.
nabeshima@eng.osaka-cu.ac.jp

私は現在、大阪市立大学大学院工学研究科大学院都市系専攻(土木+環境+建築)に属して研究と教育に従事して19年になります。大阪市立大学は2012年に女性研究者支援室を立ち上げ、私は縁あって設立当初からその運営に携わりました。2015年には支援室室長を務め、2016年からは支援室運営委員会の研究力向上部会の部会長を務めています。正直、私自身はこの支援室運営に携わるまでとくに女性研究者を支援する意義や必要性をあまり理解していませんでした。学部卒業後5年間は大阪市立大学生生活学研究科の博士課程に在籍し、大学院生時代に結婚、学位取得後に27歳で工学部の助手になりました。それから40歳になるまでは、とくに女性特有のライフイベントに遭遇することもなく、同業者の夫と二人暮らしなので、仕事に没頭できる環境を享受していました。見た目は女性ですが、生活スタイルは男性と変わらず、周囲の男性教員と同化することによって周りとうまくやってきたという感じです。ところが、今から3年前の43歳のときに乳がんを発症し、仕事を続けながらですが、約2年かけて手術や化学療法など標準的な治療を行いました。現在は心身ともに復活することができ、仕事に対する意欲も回復してきました。闘病中、仕事量はがくんと減りましたが、不思議と仕事中は病気のことを忘れることができたので、闘病一辺倒になることなく、仕事は心の支えにもなっていました。女性研究者支援室室長を引き受けたのは、まさにその闘病真っ只中の時期でした。これまで、女性研究者でありながらも運に恵まれほとんど困難な状況に直面したことがなかったので、「女性研究者支援」と言われてもピンときていなかったのですが、病気のおかげで女性のライフステージと健康や仕事について真剣に考えるようになりました。病気が発覚して最初に相談したのは支援室のコーディネーターで、乳がんや治療に関する役立つ情報を教えてもらい、冷静になりました。工学部約100名のうち女性教員が6名しかおらず、学科では私1人だけという状況だったので、相談できる場所があって本当に良かったと実感しました。自身の体調不良や病気、子育て、介護などの問題に直面したとき、身近な人に相談できる環境を整備するこ

とは、女性研究者支援のなかでも重要なことだと再認識しました。これまでは一部の強運のもち主だけが仕事と家庭を両立することができたのですが、これからはすべての女性研究者がライフイベントの困難に直面しても仕事を継続できるような、相談・支援体制が必要だと考えています。また、大学運営の観点からは、女性教授比率や理事クラスの女性幹部比率の向上が課題になっています。大阪市立大学では今年の4月に初の女性副学長が誕生しました。今後はこのような指導的立場の女性比率を向上させ、組織の運営に複数の女性が関与していくことが、組織の持続的な発展に不可欠であるという共通認識を醸成していきたいと思えます。そのためにも、各々の女性研究者が自身の研究力を向上し、業績を積み重ね、昇進するための努力と周囲のサポートが必要です。今、私が期待している制度はプロモーションメンターです。研究科長クラスの教授が昇進に関する相談に乗ってアドバイスをするような制度のことで、研究の相談をするメンターとは別です。誰もが良い上司に恵まれるとは限らないし、人事関係の情報が入りにくいこともありますので、この制度を本格的に運用できれば、上位職の比率を上げる効果があるのではないかと思います。

最後に、人生の折り返し地点に差し掛かり、新たに始めた趣味について紹介します。これまで「研究以外の趣味は何ですか?」と聞かれると答えに窮していたのですが、最近「乗馬です」と即答しています。半年ほど前に近所にある乗馬クラブで体験乗馬をしたのをきっかけに、馬の癒し効果に感動し、即日会員になりました。月に3~4回程度しか通えないのですが、本当に週末が楽しみになりました。週末に乗馬に行く時間を確保するために、仕事や家事を計画的に実行し、張りのある生活リズムができました。古代中国の政治家が文章を考えるのに最も都合が良いという三つの場面として、「馬上、枕上、廁上」の「三上(さんじょう)」を挙げています。現代の解釈では「通勤途中、布団の中、トイレの中」で頭がリラックスしているときとなるようですが、私は本当の馬上で良いアイデアを思いつくような気がしています。